

中国当代文学

——九十年代における長編小説の基本傾向

賀 蘭

一、九十年代文学の基本特徴について

八十年代の文学と比べると、九十年代の文学には新しい特徴が見られる。それは文化背景に起因する。八十年代の文化状況は乱世が治まり、冷静な時代にかえる過渡期であった。しかし、九十年代の文化状況は活力ある段階に入ったことである。去年、中国全土二百名の著名文学評論家により、『九十年代文学研究会』『対九十年代文学的考察』^①という会議が開催され、九十年代の文学の基本特徴について論議された。その時の代表的な評論家の意見を幾つか抄訳する。

「九十年代の文学創作には基本的に三種類の型がある。第一の型は主流意識文学（同時代の主な思想意識を表現する文学作品）、第二の型は通俗文学、第三の型は個性的文学である。この三種類の型の文学が互いに平行、交差して展開することによって、作家たちの創作活動が多くなった。しかし、個人と社会・功利性と非功利性・写実と虚構・雅と俗という対応関係がうまくいっていないので、創作作品が粗雑になっている。」（文学評論家の何鎮邦）「九五年以前の文学傾向は明確

になっていたが、九五年以後の文学傾向は主題においても書く姿勢においてもはっきりとした中心的なものとはなくなっている。幾つかの文学傾向を並存させ、“無名状態”になっている。この“無名状態”により、九五年以後の文学はいろいろな時代の主題を反映し、多層構造の複合文学を形成している。そして、作家の叙述立場は更に個人化し、一人一人の作家は殆ど相対的で独立的な精神世界を持っている。作家は個人の心理空間を開拓することにより、现实生活に最も近づいたリアルな個人描写の方法を実現させている。」(『中国当代文学史教程』の著者陳思和)・「九十年代の文学を四つの時代に分けると、九十年代初期は詩作を中心とする時代だと考える。作家の創作は未だ八十年代の浪漫詩情・理想と幻想を保ち、作家の創作意識は集団主義及び団体意識である。九十年代中期は散文時代である。現実の生活は益々細かくなり、考え方も多様化する。特に新聞・雑誌等情報が氾濫して、作家達を未曾有の苦慮に陥らせている。九十年代中後期は小説の時代だと思ふ。現実の生活は小説のように大きく起伏して、作家達が落ち着いて創作活動する環境ではなくなって、商売や株の思惑売買等に転業する為、俗社会に心を奪われる心理が強くなる。九十年代後期の文学は伝記時代に入り、作家たちは集団主義から個人主義へ進み、人間の個性を扱う創作を追求している。」(文学評論家の劉敏)

勿論、評論家達は九十年代文学の欠点と文学批判の問題点について、たくさん⁽²⁾の貴重な意見をも述べているが、ここでは前述した陳思和の文学基本傾向の論点に基づき、九十年代長編小説の基本傾向を分析したいと思ふ。これを分析する前に、なぜ九十年代に長編小説は急増したのかを論じ、又、小説の基本傾向を分析する重要性を説明したいと思ふ。

(1) 長編小説の急増について

「時代の記念碑」と言われる長編小説は、九十年代には毎年平均八・九百部⁽²⁾が出版された。この驚異的な数は中国文学史上に最高記録を作った。確かに、傑出した長編小説は往々にして文学成長の結果で、文学時代の重要な印である。しかし、長編小説の質と数量の急増は別のことである。この原因は四つある。一つは、八十年代から多くの中短編小説を創作した

経験によって、作家達が豊富な芸術的実践機会を得たこと。二つは、出版業の技術をIT化することにより、長編小説の出版に要する期間が大幅に短縮されたこと。三つは、八十年代と比べて、より一層自由になった創作雰囲気と市場の拡大が作家達に良好な文学創作の環境を提供したこと。四つは、市場経済の影響を受けて、作家達の価値観が左右される。つまり芸術の為の長編か金の為の長編かという文学の質が問われ、作家の文学態度・人格に対する厳しい評価を受ける。これに耐えて、高い芸術評価を得た作家は多くない、金の為の長編は必ず多産される。その結果、九十年代の長編小説は量的に繁栄の局面迎えることになった。

(2) 小説の基本傾向の重要性について

中国当代文学は急速に発展し成熟しつつあるが、「新时期文学」⁽³⁾に一時代を画する大家は未だ出現していない。「神樹」⁽⁴⁾の著者、鄭義は次のように述べている。

「ロシアは輝ける歴史を持つとともに長い苦難を生きてきた。(中略)ロシアの作家と芸術家はこの苦難を表現したばかりか、絶望することのないロシア精神を表現したのだ。彼らを通して、苦難はこの民族が生存し続けるに不可欠な精神的支柱へと昇華されたのだ。ロシアは無駄に苦難を味わったのではなかった。だが我々の苦しみは無駄だった。一世紀半に及ぶ中華民族の災難は壮観でさえあるが、一つとして真に不朽の作は生れなかった。歴史は教科書により後世に伝えられるが、人類精神は文学芸術の松明によって伝わるのだ。その意味で我々の苦難は無駄であったのだ。」(『神樹』の訳書より)

鄭義の「一世紀半」という言い方は偏って過激だと思うが、「新时期文学」には不朽の作は確かに生れていない。この意味で「新时期」では一人の作家、一つの作品のみを詳細に研究する方法も悪くないとは言えるが、私は常に作品の基本傾向を感知し、必ずその作品を同系統の作品と連繫させて考え、そしてその作品を時代の大きな背景の中で分析することになっている。こうしなければ現今中国文壇の「樹を見て、森を見ず」という現状を変えることができない。その為の一つの

作品を分析するに当たり、その作品を生み出した文学現象の全貌に注意を払っている。そしてこの文学現象を分析する際、この現象の美学的特徴を述べるに止まらず、さらにこの美学的特徴が如何なる具体的な内容によって構成されたのかというところにも着目する。本論は当代文学史の立場から一つの作品を論じることではない、九十年代という時期の作品を論じたいと思う。そこで中国社会に大いに影響を与えた『白鹿原』⁽⁵⁾を選んで詳述し、他には概要だけを紹介する形、『神樹』のような対照して論ずる形、『靈山』⁽⁶⁾のような評論だけ抄訳する形等で分析してみよう。

二、九五年以前の長編小説の基本傾向

(1) 九五年以前の文学の社会文化背景

八九年「六四」天安門事件以降、中国政府が推進する経済自由化政策は政府と民衆との矛盾を緩和させている。九十年代に入り、国際的文化交流は一段と発展してきた為、「新时期文学」の研究を充実させた。「マルクス主義でなければ、中国は救われない」という理論も徹底に議論された。すべての科学を唯一絶対的な理論で統一しようとすることは不可能である。現代の複雑な世界は我々人類に多様に生きる為の哲学を求めている。一つの哲学理論だけが宗教のように信仰する時代は永遠に到来しないであろう。そのため、当時の知識分子層には重大な転向が生れ、政府との関係は対抗から和解へと変化した。

九〇年、劉再復と李澤厚は共同著作した『告別革命』(革命よさらば)の中で改良主義を提唱した。翌年、王力雄は『黄禍』の中で政治寓言の形を用いて、中国がロシアと同じように解体する怖れのある未来凶形を描いた。これが契機となり知識人に強い刺激を与え、無政府は悪政府より怖いという声が揚がり、八十年代の過激派を批判すると同時に「六四」事件も再考することとなった。九十年代初、「新権威主義」に関する争論は極めて盛んになった。代表人物は呉稼祥・蕭功秦

等で、彼らは保守思想に対して現代化傾向を持つ新権威を打ち立てることを唱導し、そのことにより市場経済を押し進めることができる」と主張する。新権威者が社会と経済活動を調整する中で経済改革の成否が決まると強調した。

九〇年十二月『中国青年報』の思想理論部が主催した「中国伝統文化と社会主義現代化座談会」にて、「新権威主義」に基づき、正式に「新保守主義」の概念を提出した。蕭功秦は、「新保守主義」は変革のプロセスでは現代化の積極的な仲介とレバーを効かせる意味から、伝統価値系統・イデオロギー・権威形態の意義と積極的な作用を再び肯定して、その基本的立場から漸進的に中国の現代化を推進すると概括した。

九一年二月、林崗著『激進主義在中国』・翌年四月、余英時著『再論中国近代思想史的激進と保守』の中で「保守」という字義が再評論された。余英時は「五四運動」に対して批判を行い、歴史の断裂性に反対することを強調した。実際には彼らは「五四」以来、進歩を防げる「保守」という言葉を訂正しなかったと考えられる。

九一年十一月、『学人』の創刊号に陳平原は『學術史研究隨想』の中で八十年代の乱世的学風を批判して、學術の規範を提唱し、學術伝統に従って學術權威を立て直すべく「學術突出、思想淡出。」（學術を際立たせ、思想をフェードアウトさせる。）を提唱した。そして文壇には陳独秀・胡適・魯迅等の思想大家が次第にフェードアウトされて、陳寅恪・王国維・錢種書等のような學術的大家が序々に注目されるようになる。

すると中国政府は政治的イデオロギーのかわりに伝統文化・民族主義を利用することによって、相対的に安定した局面を維持しようとした。一方、知識人は伝統文化に回帰することを望んでいた。伝統文化への回帰により八十年代の文化激進主義を緩和することができるし、日増しに発展する大衆商業化による文学レベルの低下を弱めることができると考えた。そこで九十年代までにずっと腐敗没落した伝統文化の代名詞と見られた国学がブームになってきたのである。

以上述べた社会の文化背景下に、「第四届矛盾文学奖」を受賞された『白鹿原』（陳忠実）・『騷動之秋』（劉玉民）・『戦争

和人』(王火)・『白門柳』(劉斯奮) 四つの作品は、皆現実主義によって伝統文化・民族意識を追求した代表的作品である。それ以外注目された同類作品は『廢都』(賈平凹)・『心靈史』(張承志)・『務虚筆記』(史鉄生) 等がある。歴史叙述を基調として伝統美学を追求した代表的作品には『曾国藩』(唐浩明)・『雍正皇帝』(二月河) 等がある。歴史事件を虚構するという「新歴史小説」の代表的作品には『我的帝王生涯』(蘇童)・『五則天』(須蘭) 等がある。「先鋒・実験派」⁽⁷⁾を實現している過程に生み出した代表的作品には『呼吸』(孫甘露)・『九月寓言』(張煒)・『施洗的河』(北村) 等がある。これだけ優秀な作品が多い中でも、なぜ『白鹿原』が特に注目される作品として扱われることになったのであろうか。

(2) 伝統文化回帰の傾向について

『白鹿原』の舞台は陝西省西安郊外の白鹿村である。(中国の関中と省略) 白・鹿両姓一族三代に亘る人物を主人公として、白鹿村の人々の当代までの半世紀、自然と社会事変の中に自然本能と社会道德の衝突・民族文化と現実変革の戦いを描き込んでいる。以下に『白鹿原』の評価について幾つかを引用しよう。

「従来の人物の類型化を打破し、民族的人間像の創造に新しい領域を開いた。階級闘争と政治的視点を捨て、全く人道的立場に立って書いている。」(雷達氏)・「壮大な氣宇をもつ秀作、『紅樓夢』と同列における。封建文化に育まれた民族精神に鋭くメスをいれ、封建社会はなぜ何千年も揺るがなかったかに回答を与えている。」(蔡葵氏)・『白鹿原』は民族特有の生きざまと精神文化・歴史の転換を、歴史本来の姿で客観的に再現している。そこには世の中の非情な転換を超脱した後、大いなる達観がある。歴史への奥深い洞察と鮮明な現代性を見事に統一した哲学的示唆に富むこの大作は、我が国の文学史に銘記され、不滅な生命を保っていくだろう。」(黄国柱氏) (『白鹿原』訳書のあとがきより、注(5)参照)

この小説は民族利益と国家利益が一致すれば衝突もする関係をうまく解説したと政府当局が称賛する。しかし作者は民族文化を借りて政府の正統意識に抵抗すると同時に、民族文化自体の矛盾性を指摘している。

A 『白鹿原』中の传统文化の矛盾性について

厳しい封建道徳により自らと一族を統率し、村規則を定め、学塾を興し、「仁義白鹿村」を築く族長白嘉軒がこの小説の主要人物である。彼は白家の実直な作男の鹿三に仁義を立てて、主人と下僕の関係は見られず、土地に対して依存する同族兄弟のような関係であった。しかし彼は鹿姓の傾斜地を買うことによって、仁義を離れ綿密に計画して、鹿姓に損害を与え、自分の子孫が幸せになる為の一步を踏み出す。これは勿論人間の生存本能からきたものであるが、道徳的意味の「仁義」が生存的意味の「利益」に敗れたことは、関中の伝統倫理観念の矛盾性を物語っている。

白嘉軒は子供に厳しく孝悌教育を受けさせ、苦心して家を支えている。これは今日でも関中農村の理想的家庭である。しかし礼儀正しく育った息子の白孝文が女色に誘われて一晩で自分とは正反対の博徒・アヘン吸引の放蕩息子となった。一方、娘の白靈は父親の決めた道に反発し、革命に参加し、革命根拠地の肅正運動でスパイ嫌疑をかけられ生き埋めにされる。白嘉軒から見るとこの二人は不孝な子であり、白姓の中から二人を除名することを宣言する。作者はこのようなシーンを通して孝悌教育の論理観念が社会・家庭を安定させ、家庭成員の自我抑制に積極的な役割を果たすことを説き、同時に孝悌教育の人間性抑圧を如実に示している。

又、関中の貞潔婦道を中心とした女性観念は田小鵝の性の話題に表現されている。小鵝は地主郭の妾、のち黒娃の妻。彼女の存在は郭の性欲を満足させることではなく、わずかに郭の若返りの為でしかない。小鵝の人間としての価値は子を産み、性の道具であるという一般女性より更に低い。仁義を重んじるという関中文化はこのような女性に同情的であるが、その一方で彼女は与えられる運命を認めなければならないのである。しかし小鵝はこの運命に甘んずることなく、彼女の色に陥る男達は皆悪い報いを受けていく。この不貞な行為は白・鹿一族には受け入れられず、結局舅の鹿三の手に掛り彼女は短い生涯を閉じることになる。小鵝とは反対に白嘉軒の妻仙草は夫に従い、老人を敬い、白家に息子三人・娘一人を

もうけ、良妻賢母として代々継承の任務を達成する。仙草のイメージは表から関中文化意識の理想女性を描いた。その一方小鵝によって描かれるものは残酷と殺人である。地主郭の小鵝に対する迫害はいうまでもなく、白嘉軒、鹿三らの道徳・宗族法による小鵝のすべての正常生存条件の剥奪が、彼女を売春婦の道に落としめた。このことから『白鹿原』の貞潔婦道的性観念は一方では社会的風気の教化と家庭の和睦を表し、一方では殺人をも行う非人道の宗族制を包含していると言える。

B 『白鹿原』中の宗族社会・宗族意識の矛盾性について

白・鹿一族は婚姻関係で繋がっている団体（宗族ともいう。以下宗族と省略）である。この血縁関係と祖先崇拜を軸に代々の子孫が一丸となって何度も天災と人災の危難の時に助け合ってきた。だから、宗族の宗権は政権よりも強い凝集力を持ち、この凝集力の下に宗族は族人を厳しく治める。白嘉軒が祠堂で博徒とアヘン吸飲者を罰した人数は一度に十人を数えた。その方法は罰金・罰糧・罰跪・鞭打であり、博徒の手に熱湯をかけ、アヘン吸飲者の口への人糞の詰め込みである。不倫に対してトゲ刷毛で四十回打ち、その為に小鵝は重体となり、不倫だという冤罪を蒙った族人の白狗蛋も打ち殺された。これによって読者は作者の宗族存在の積極的な意義付けと、一方で宗族意識が齎す個体を殺害する危険性を味わうことができ、宗族の力に対する人々の敬意と恐怖による秩序支配の事実を認識することができる。

私は『白鹿原』からの一つの提示に気が付いた。それは宗族がイデオロギーとして人の心に浸透し、血縁の継続によって永続し、その上社会的・組織的・経済的範囲を越えて一つの思想となる。思想としては関中の人々に正と負の影響を与えた。正の影響は社会が発展する中で人々に自発的に道徳観の養成を促すことと、民族の団体意識を培養することである。族長は宗族のために身を捧げ、族人は家と族との共存を考える。この団体意識を押し広めれば、国と家とが共存するという民族意識に繋がる。この民族意識は民族の英雄と英雄の民族を作り、民族主義と愛国主義へと発展し、中華民族の生命

と共に継承されてきた。負の影響は個人の思想を束縛し、人々を祠堂に帰依させる。黒娃と白孝文が宗族に反逆した結果、家を無くし、肉親を失い、最終的には宗族に帰順するしかなく、その「離宗帰宗」のシーンは関中人の道德観を如実に示している。黒娃は祠堂で跪き、「黒娃知罪了」と泣き叫ぶ、祠堂の盛大な儀式とその厳しい雰囲気は中華民族文化の巨大な力を感じさせる。その力をはるかに歴代封建統治の思想文化政策を超え、宗教等すべてのイデオロギーを超越して、人の心を統治することによって宗族・社会を統治する効果を達成したのである。

C 『白鹿原』の恒久性について

陳忠実が記述しなかったのは、『白鹿原』を借りて民族文化に対しての解説と批判である。さらに中華民族の現代化に向かう歩調の緩慢な原因を記述していた。中国では封建主義は制度として存在していなくとも、意識としてはずっと続いていた。『白鹿原』の提示通り、多くの思想家により二千年に亘って作り上げられた伝統の封建思想は全民族の血液に滲み込み、作者の陳忠実も含めて民族の性格と個人の人格の一部にさえなっている。作者は次のように述べている。

「全ての悲劇の発生は決して偶然ではない、いずれもその民族の衰亡から復興隆盛に向かうプロセスにおける必然である。これは一つ社会変転、歴史変遷のプロセスである訳です。(中略) そう悟った時、以前のように、ある災禍を嘆いたり、二度と起こらないようにと願う儂い期待は抱かなくなりました。」(『白鹿原』訳書のあとがきより、注(5) 参照)

作者のこの情感はもともと封建意識の強い影響下による発言である。仮に宗族の倫理道德を標準とする時、従順であれば立派な人間になり、違反すれば追い出される。逆に人道主義を標準とする時、自我があれば人間として認められ、自我がなければ非人間と見なされる。そう考えれば『白鹿原』の恒久性は『紅樓夢』とは比べられない。前述の文化背景下の主流意識を代表する「新保守派」は勿論『白鹿原』を絶賛している。だから『白鹿原』は中国全土で圧倒的なブームになった。だが文化背景が変わることによって『白鹿原』の人気度も変われば、恒久性があるとは言えないであろう。

しかし『白鹿原』は清朝末年から社会主義新中国への激変する五十年の重大政治事件は架空の白鹿原という地に歴史的情况を再現した。その歴史的情况を描く時に歴史の変動を登場人物の言動の中に融合し、歴史的進展に対して能動的表現をさせた。その他『白鹿原』は現実主義・魔幻的リアリズム・隠喩手法等を活発に取り入れ、虚実を交合せ、入り組んだ構成の中で審美感を広い想像の空間へ広げさせて、読者に閲読の享受を提供している。

(2) 新保守主義の傾向について

『白鹿原』と同様な評価を受ける作品に『九月寓言』がある。この小説は農村の伝説・農業労働の聖視・泥土の神秘感を表している。そして伝統文化の宗教と現代文明の物質を同時に叙述中に交えて、伝統的秩序と現代人の物質的欲望について二重の疑問を提出した。作者は歴史・伝説・現実の三つの角度から小さい村の生活の秩序にぶつかり、歴史表現には定められた生存のロジックを表し、伝説表現には人々が理想を追求することを隠喩し、現実表現には現代工業文明の圧力的姿勢を含めた。作者の考える伝統農業文化は衰微を辿るものではなく、精神を救う楽園である。魯迅の『故郷』の中の「五四期の農村」を明らかに対照としている。この小説は反現代化・田園生活に未練のある保守主義の代表作品と評価された。

尚、注目された『心霊史』は死と苦難を賛美する小説である。作家の張承志は中央アジア・新疆・甘肅・寧夏・青海等のイスラム教の歴史を調査している内に、イスラム文化に傾注し、中国の一番貧乏な黄土高原で困難な生活をし、しかも二百年の間民族自由の為に恐れず五十万人が犠牲になった「哲合忍耶」という精神に心から従う。この作品はあたかも「哲合忍耶」という言葉を血涙で解説するようなものである。この言葉はアラビア語に由来し、大きな声で賛美するという意味である。この小説は「死を以って信じる宗教を証明してやる」という宗教保守主義を示した。回族民族歴史を追究する少数民族文学であり、宗教保守主義の代表作品とも言われるものである。

中国少数民族の伝統文化は中国国内での先進文化とは言えない。むしろ原始的で純朴な美的文化に近い。原始的な生活

の中、その文化意識は万物に靈が有り、宗教儀式を通じて人と自然の関係を繋げるとする姿勢にある。その為に他の多くの少数民族文学は宗教的な神秘感を持っている。最近、少数民族作家達は自民族の生存・民族文化の発展・民族精神の成長に配慮し始めている。彼らは作品の中に強い民族への自尊心と同民族への責任感を表現している。「私は『哲合忍耶』の筆になりたい」（張承志語）というように少数民族意識を前面に押し出した作品が盛んに出版されるようになった。

以上に纏めたのは九五年以前の文学基本傾向である。第一章で述べた陳和思の「傾向は明確だ」とは、伝統文化回帰と保守主義の傾向が明確なことを指していると私は考えている。

三、九五年以後の長編小説の基本傾向

(1) 九五年以後の文学の社会文化背景

市場経済改革により人々は以前の道德原則・主義・理論・イデオロギーから功利と実効を個人的立身出世・思想価値の基準とする方向へと転じた。その結果は世俗化 (Secularization) である。こうして人々の左翼イデオロギーの崩壊を齎し、自由民主主義をも崩壊させる。「鬭争」もなく、「同一」でもない政治形態になっている。「六四」以降の中国大陸における知識人左派と自由派の衝突は緩和され、官・民の対立を解消し、苦境の中に異なる人達がお互いに寛容・調和・対話の可能性を探し、官・民一体の現実を認識すると共に、現実を改善するという作品も増え始めた。所謂「民間」の興起は「新保守主義」の主流意識に抵抗しつつ、「官方」と「知識人」の間に第三勢力として存在を主張するという説もある。

政府によって進められた経済自由化政策は執政者に以外な結果を齎した。民族企業と個人営業が繁栄することに對して、国有企業の不況は深刻になり、失業者が急増し、貧富の差が激しくなる。又、余剰の農村労働力が都市へ流れ、都市企画に混乱を引き起こした。更に官僚層の汚職・腐敗・経済犯罪も年々増え、「民間」に不満の声が揚がった。このような

市場経済改革を主要な内容とした作品は九五年以後急に増加し、ある雛型スタイルが表れる。これらの作品は反腐敗・反賄賂等社会問題を提起する共通点を持つ。第一に国有企業の存亡の問題。第二に市場経済の法制・秩序等の問題。第三には経済体制の転形期における人の精神的価値変化等の問題である。

とりわけ文壇では二十年前『河殤』⁽⁸⁾という言葉(青い道即ち西洋化)が瞬間流行したが瞬く間に忘れ去られた。九十年代に至ると、これに反対する言葉『原道』(白鹿原の道)が登場する。九六年、第三輯の學術論輯『原道』が出版されたが、その見出しに「原道はつまり道を探す、精神の故郷と理想世界への道を探すのだ」とある。しかし、伝統文学の『原道』は転形期の救世に役立つのか、伝統文化それ自身を反封建意識の文化に改造することができるのか、中国思想界のどこからもこの問題に対する答は提出されていない。九七年以後、『原道』に疑問を程する評論は多くなる。例えば毛崇杰は『関中大儒』非儒也』(『文学評論』、九九年一月号)の中で『原道』について次の如く指摘している。

「我々は『白鹿原』より二世紀前の『紅樓夢』を繙く時、作者は明きらかに儒教に反逆する宝玉が大儒の賈政を乗り越えることを信じる。しかしあの時代に誰が宝玉は賈政を乗り越えられると信じることができたのか、最初に出る新しい物事はいつも人々に認められないが、偉大な作家とはこの微小な新しい物事を掴むことができるほど感性を研ぎ澄ますことができる。宝玉が賈政を超越するのを信じているからこそ、宝玉のような典型的な人物を描き出した。宝玉と黛玉から、儒教の“仁義”を“吃人”と見なした『狂人日記』の主人公、『傷逝』の子君と涓生、『激流』の高覺惠等の人物像は民主主義啓蒙運動の中での中国歴史上の具体的な人物例として描かれてきた。更に言えば『儒林外史』を始め、“儒”が中国文学史上で肯定的な評価を得たことはない。これは中国明末に始まった資本主義の萌芽と思想史の王夫之・黄宗義・顧炎武らによる民主主義啓蒙とが一致したからである。歴史は更に啓蒙は儒教を乗り越えるということを証明してもいる。」

これは二十一世紀の入口で立っている中国人が『原道』について反省する気持ちなのであろう。ところが最も強く反発

するのは新保守主義者達の魯迅に対する批判である。王富仁は『我和魯迅研究』の中で現在の知識人に対して

「我々は社会の発展・中華民族の前途・中国国民性の改造の問題を考慮しているけれども、これはどうしても自分と関係ない社会問題であり、自分に対して一番重要なのは生活を維持することである。我々は魯迅のような社会と個人を一つに揉んでいる精神が欠けている。儒教から入門してあと道教に転じ、対外的には儒教で国内に対しては道教だというのは、従来の中国知識人の重要な伝統である。中国には十二億もの人がいるが、本当に我が全民族の発展に関心を持ち、これを基として自分の人生の道・文化の道を選択する人は恐らく何人もいない。これこそ中国現当代文化の最も鍵を握る問題で、魯迅の最も輝ける所でもある。(中略) 当今個人、本能、物質、性的なもの等を人類生活の全部、一つの価値、一つの美となる時代に対して、やはり魯迅存在の価値は社会的な、精神的なものだ。」(『魯迅研究月刊』、二〇〇〇年七月号)

と魯迅を評価する意見を述べた。魯迅が「中国人は従来『人間』としての権利を勝ち取ったことがない」「墳・灯下漫筆」の中で述べているこの中国人への批判が今でも当たっていることを考えれば、私は魯迅文学の価値はさらに高いものとして今も評価ができると考える。

前述した文化背景下の九五年以後の文学傾向は、伝統文学回帰・保守主義ばかりではなく、第一章でふれた陳思和が論じた通りに多元化・各種傾向の平行・「無名状態」を表している。

「第五届矛盾文学獎」を受賞した『抉擇』(張平)・『塵埃落定』(阿来)・『長恨歌』(王安憶)・『茶人三部曲』(王旭峰) 四つの作品も多種傾向を呈した。そして市場経済改革を描いた作品には『車間主任』(張弘森)・『天下財富』『人間正道』(周梅森)・『喜馬拉雅山』(何頓) 等がある。目前の生活を反映し、転形期の社会変革の現状を素早く把握した作品には『百日陽光』(范小青)・『慶典』(王立誠)・『北方城廓』(柳建偉) 等がある。女性文学の代表作品には『羽蛇』(徐小斌)・『紅魘方』(毕淑敏)・『大浴女』(鉄凝) 等がある。家族の変遷を描いた作品には『第十二幕』(周大新)・『繾綣与決絶』(趙德發)

等がある。中国郷土と現代性の対立を描いた作品には『夢土』(少鴻)・『高老荘』(賈平凹)・『家園筆記』(談歌)等がある。歴史を回顧する作品には『太平天国』(張笑天)・『洛神』(胡曉明・胡曉暉)等がある。「新歴史小説」の代表作品には『許三觀賣血記』(余華)・『新乱世佳人』(黃蓓佳)等がある。現代主義の代表作品には『日光流年』(閻連科)・『故郷面和花朵』(劉震雲)等がある。古典主義の代表作品には『草屋子』『紅瓦』(曹文軒)等がある。大陸で出版禁止となった作品には『神樹』(鄭義)・『靈山』(高行健)が等ある。その中の傾向が明確な作品を幾つか纏めてみよう。

(2) 現実主義の傾向について

世紀末、現実を反映する作品は大きな比重を占める。『抉擇』の主人公の李高成は腐敗した途方もない綱に取り巻かれる。この綱を編んだのは彼の上司・部下・親戚である。腐敗を懲罰しようとするればこの現状を正視し、突破しなければならぬので、彼の「抉擇」は相当に難しい。特にこの小説は映画化されてから、反腐敗の場面が更に具体的に表現されているので、労働者に一段と人気が出た。『喜馬拉雅山』は市場経済の潮流の中で知識人の精神的プロセスを表現した。主人公の羅定は中学校の教師である。生活は豊かではないが安定している。しかし急速に発展する市場経済に誘惑され、彼はついに職をやめ、商売して成功する。だが、彼は常に心の憂鬱から抜け出すことができない。彼の精神状態は知識人の市場経済成長期に避けられない心理的悲劇を反映している。『車間主任』の労働者達は生産高の減少・赤字・激しい競争・リストラ等転形期国营企業が諸問題を果たして乗り越えることができるか。『人間正道』では都会の改革が描かれ、『天下財富』では企業改革が描かれているが、作者はこの二作を通じて、「労働は世界を作る」という労働者が持つ精神を表出した。現実生活の様々な困難は人々の複雑な生態を形作る。それらの描写は生活実感に溢れ、作家たちの筆勢は読者に本来の生活の姿に恰も直接触れているかの如き感覚を齎す。市場経済改革期の作品は八十年代の「改革文学」の継続で、「改革文学」と比べると、生活から得た感覚を最重要視し、理性或いは思想をその感覚の中に含みこんで描いている。錢鐘書は「理

之在詩、如水中塩、密中花、体匿性存、無痕有味」(『談芸録』より) というように文学をより社会生活に近づかせ、現実主義に要求される高度なりアリティに到達させるよう努力した。

(3) 家族史を描いた傾向について

家族小説は、時代の変遷を家族の興隆と衰微の中に溶け込ませ、郷土・文物・民俗を用い作品に地方の彩りを塗り付け、又、歴史の起伏により作品の人物に多様な生涯を与えている。このような家族史を叙述する長編小説はここ数年間、目立っている。例えば二十世紀の中国史詩と言われる『第十二幕』は、河南省南陽の尚達志・尚立世・尚昌盛一家三代が「尚吉利」という絹商業を苦心して経営する家族史を描いている。

小説は様々な人物像によって家族利益の闘争・愛情の葛藤・知識人の良心等の角度から、二十世紀における中国民族工業の発展の全貌を描き出した。作者は女主人公の口を借りて、尚達志が物を重視し、人を軽視する人生の姿を指摘している。尚は一生涯愛情を抑圧し、物質・名誉等の世俗的幸せを求め、結局人の道・人の性に相反した人生の苦海を泳いでしまふことになる。尚の家族史には五十年前の工業社会を反省する場面もあるし、五十年以降現在に至る工業社会に問い詰めることもある。もし現代化の進展が人間を健全に発展させることができなければ、我々は出発の初志に反するではないか、という問い詰めは現代批判として特に意味があるであろう。又、社会生活の角度から考える時、三十年代の著名文学家矛盾の『子夜』を連想することができる。『子夜』は一つの時代を描いており、『第十二幕』は一つの世紀を描いている。私は『子夜』の主人公が時代の要求に沿う為に、作者が作り出した人物であることに気付く、しかし尚達志の異常な人生を生み出したのは、この歪んだ時代であることにも気付く。実は作者が描き出したいのは官僚資本が工商業資本を搾取するという本質がこの百年変わっていないという現状にあると考える。この意味でこの小説の人物像は『子夜』のそれより家族問題を深く掘り下げた作品として評価できるだろう。

(4) 海外文学の襲来

ここ数年間、台湾を含む海外で出版された多くの小説が当代中国文学史に取り上げられた。これらの小説は世界各国の風土・人情或は大陸に対して距離を置いた目を以って、作品に鮮明な特色を与え、中国当代文学を豊かなものにしていく。

「中国農村の縮図」と評価された『神樹』の舞台は、山西省太行山脈の神樹村にある。村に樹齡四百年の巨木があり、「神樹」と呼ばれる。この小説は村民が血を浴びながら奮戦して神樹を守るというストーリーを展開する。政治体制の変動下に趙・石・李という三大家族の間の殺し合いと生き様を描いている。この小説は中国の国内革命が全て農民蜂起からという深刻な問題を提示している。李家族の李金昌の身上から我々は陳勝・呉広・劉邦を経て李自成まで、農民が歩んできた道を見ることが出来る。李金昌は農民独特の悪賢い手段で権力の座に付くと、神樹村を小王朝に変え、自分も土地の皇帝になる。この土地の皇帝が政敵の趙伝牛を殺害する場面は悲惨と言うしかない。農民は政治上の皇権主義者である。皇権の特徴は「天無二日，土無二王⁽⁹⁾」という専制である。人民政権は昔の皇権の上に樹立されたので、皇権意識が消えるのは不可能であり、従って農民蜂起を最も恐れ、農民が群れになって「神樹」を防衛するのを軍隊によって鎮圧するのは必然である。「中国古来 飛鳥尽，良弓藏，狡兔死，走狗烹」ということがある。封建帝王がこれをやっても珍しくはないが、なんと我が堂々たる社会主義国家がこれをやり、そのやり方の残酷無情さは封建帝王さえも叶わず、且つ関わる範囲の広さは前代未聞である。」(季羨林著『牛棚雜記』より)

小説の最後、数百名の死傷者が出る大虐殺の場面は中国の民主主義はただの幻覚だという命題を隠喩している。小説中の趙家文は村長で現共産党支部書記であり、炭鉱経営者でもある。作者は彼に民主主義思想をもつ当代農民のイメージを与え、幻覚の民主主義に真実の光を投射する。又、李来弟は趙伝牛の妾、趙家文の母、石建富の愛人である。この人物が仮に白鹿原であったなら、或いは娼婦と見られたかも知れない、神樹村では彼女の人格は尊重され、自由の女神の如く神

樹防衛戦で献身した。「性」について作者は『神樹』のあとがきで次のように述べている。(『神樹』の訳書より)

「文人の文学と(いまだ文人の清掃が及ぶことのない)民間文学とは性生活と性意識の上でおおいに異なる。あるいは孔子が『詩経』を書き改めて以来、民間の生々しく露骨な性意識は歴代の文人に去勢されて『中華民族独特』の『含蓄ある美』となったのだ。幸い私は農村で六年暮らし、去勢されていない素敵な男女を見てきた。私は秩序を乱すつもりでこのように述べているのではない。文学とは何かに反対するために存在するのではなく、文学とは自足的なものなのだ。『神樹』について言えば、真に潑刺とした性描写は作品が歴史を越えて生命に達する助けにしようとして試みたものなのだ。」

陝西の大儒『白鹿原』と山西の文人に去勢されていない『神樹』は描かれた時代背景が殆ど同じであるが、ただ一本の黄河に隔てられることで、作品の主旨が全く違っている。このことは魯迅と郭沫若を思い起こさせる。魯迅は伝統文化の弊害を徹底的に批判し、西洋文化に蓄積された独立意識と自由の精神を理性的に深く理解していた。郭沫若は中華民族を美化する願望を持って、彼の文章には孔子とゲーテ、王陽明とスピノザ、老子とニーチェの共通点が多く書かれている。更には中国当代文壇に「矛盾文学獎」を受賞した陳忠実がいるし、アメリカへ亡命した鄭義もいる。

「安易な体制批判は、かえって小説を政治の絵解きにしてしまう恐れがある。羽ばたく想像力を生かすためには、徹底した言語精錬と独創的構力が不可欠だ。」(九九年十月二十四日の『毎日新聞』「今週の本棚」欄に張競の評より)

という評もあるが、例えばゲーテの『若きヴェルテルの悩み』が必ずしも精錬の作とは言えないにもかかわらず、その真実の恋愛は今でも人々に感動を与えているという例もある。『神樹』はその現実主義の立場から猛烈に封建意識を攻撃し、正面から反封建思想の旗を掲げることによって、人々に深い印象を残しているのであろう。

又、九九年中国当代文学の最大の話題は、高行建著『靈山』のノーベル文学賞受賞であろう。『靈山』は九〇年に出版された。この力作は章ごとに一人称と二人称で表現されている主人公の旅行中の見聞・体験・思考が綴られている。その他、

九九年に出版された『一個人的聖經』も力作である。作者を思わせる主人公が、今度は章ごとに二人称と三人称で表現されている。中国に暮らした幼年時代から政治運動に揉まれた「文革」期、そして海外への「逃亡」までの回想と、「遊民」となってから現在の西洋での生活が交互に語られる構成となっている。高行健の受賞についての評を幾つか抄訳する。

「ノーベル文学賞を受賞したのは決して単純な文学活動の目的だけでなく、受賞を借りて政治の目的を実現する為のものであり、文学問題を利用して、中国の内政を干渉したものである。」（『人民日報』の評論）・「中国人の目から見るとノーベル賞の権威は失われてしまった。高行健は立派な作家だが、彼より良い作家が多くいる。ノーベル文学賞受賞の結果を見れば外国人が中国文学をあまり理解していないことが分かる。」（老舎の息子、中国現代文学館館長の舒乙）・「高行健は八十年代の中国劇に大きな貢献をしたが、印象に残った長編が殆どない（出版禁止される為）ので、評価もできない。」（作家の莫言）・「ようやく中国の作家が受賞することができたが、ノーベル物理学賞と経済学賞は本当の実学に対する賞だが、文学賞は運が良い人が受賞すると気が付く。」（作家の陳村）

ノーベル文学賞は一カ国の文学のトップレベルに対する賞ではない。しかし、中国作家の題材が伝統的であろうと、精神が中国式であろうと、作家自身の視野、心を広げなければならぬ。そして作品も外国の読者に受け入れられなければならない。他人の事を深く理解すれば、自分の事もよく理解される。この意味で、当代の作家の中で、高行健は極めて深い表現力のある中国人作家として無視することはできない。

(5) 現代主義の傾向について

現代主義思潮が中国に芽生えて以来、その強い勢いは中国の小説家にも影響を与えた。多くの小説家はこの思潮を迎え入れつつ、中国文学の方法論において試行錯誤を繰り返した。その結果二十年の間当代文学の全様に大きな変化を齎した。如何に現代主義を中国化するか、如何に外国語の創作経験を漢語創作活動の栄養に変えるか、この難題は作家の知恵に試

練を与え続けた。

この頃『日光流年』が先鋒派色を強め文壇に注目された。これは悲惨な死の話を叙述した作品で、しかもこの話を超口マンチックな想像の空間で展開している。豫中（河南省）三姓村の多くの村民が喉病で死亡する。寿命は四十才を超えることができず、村民は生命の極限を越えるべく戦う。売春し、人間の皮を売る。土地を開き水を引く。死ぬ為に生き、生きる為に死ぬ。絶望の循環の中でも希望と力を持ち続けることを示し、次々と失敗に終る運命の中に精神の永劫を称美している。作者は死を以って生存を描き、死から生存の意味と無意味を観察し、中国農民の強靱な生命力で現代を象徴し、人類社会の長命願望を寓言している。驚くべきことは作者は短編の美辞麗句を長編に要求し、四十万字あまり一字一字工夫を凝らす。それは詩の如くまた絵の如くという感覚を生じさせ、一言でいえば最新の手法を用い、最古の主題を述べているのである。いわば現代主義思潮の中国化を大胆に試みている作家である。

このような漢語創作空間の開拓については、二百万字の『故郷面和花朵』に注目したい。この小説の一・二巻は時空倒錯、場景が頻繁に交錯し、登場人物も多く、人物の古今の身分も明確ではない。例えば曹操の部下の新軍・六十年代の農民・九十年代の秘書長の身分を兼ねる等がある。第三巻は有名な小説家の間の限りのない論争や、叙述者劉小児の母の死に対する追悼を長々と記述している。第四巻は六九年代の故郷に戻って、現実と幻覚・歴史と未来等を交錯させて表現している。このような長編で物語の筋書と叙述構造がなく、明確な主題もなく、把握できる核心人物も居ない。これは当代小説の中に前例がなかったことである。しかし深く分析してみると、郷土中国が現代化の波にぶつかり、生活が変化する事を表現しようとすることを読み取ることができる。作者にとって明確な思想観念及び主題動機はあまり重要ではない。重要なのは生活状況の詳細さである。そしてこの詳細さに興奮剤を注射して、新奇なものを創出しようとする。私は適当な中国語で説明できないが、敢えて日本語で言えば「読めない」のだと思う。評論界では漢語の想像力が無限だと

いう評と、出任せに作り出した大雑炊だという評がある。とにかくある種この作風を言い当てている評の一例引用しよう。

「劉震雲らの作家にとって古いイデオロギー体系は彼らの文学観念及び具体的な創作方法を支えられなくなった。しかし彼らは文学的経典・文学的権威たることに夢を抱き、出任せに喋る誇大な言葉でこの超長小説の叙事主体を構造した。この事実は歴史を再現する効能に対して疑問を提出する、これによって当代文学の新たな可能性を予告するであろうか。」⁽¹¹⁾

(6) 古典主義の傾向について

現代主義の中国化が未だ定着していない内に、長編小説の風向は『永遠的古典』（『紅瓦』のあとがき）へと転換した。

『紅瓦』の時代は三十年前に遡り、中学生の林水の目から見た江南水郷油麻地鎮の生活情景を述べている。作者は人生に直面する勇氣を持ち、「大串連」（紅衛兵の大連合運動）「造反奪権」「大辯論」等政治色彩が強い生活内容や行政地域に制約された人間関係を描写している。この小説の物語が殆ど「文革」期にあたるので、「文革」を描いた小説と誤読する評は多い、実に『紅瓦』は「文革」そのものを指摘することではなく、ただ「文革」期を虚の背景として処理している。つまり人間性の裏面を浮き彫りにする通常の社会背景を提供するだけだと思う。

『紅瓦』には深い印象を与える登場人物が三十人ほど登場する。例えば元校長の王儒安は孤兒から身を起こし貧しい子供の為に学校を創建し教育家に成長する。ところが彼は物乞いの母娘を引き取って世話をすることが切っ掛けとなり、有名大学を卒業した汪奇涵に陥れられて学校の掃除屋にされ、代わりに汪が新校長になる。王は冤罪がとかれ校長の座に戻った後、汪に復讐する。作者はこの村の教育家の陰險な裏の性格を描いた。

又、『紅瓦』の描写方法は現代の「意識の流れ」「魔術的リアリズム」等を一切使わず、古典的な「白描写実」の手法で現実主義の美を追求している。読者は『紅瓦』に書かれた生活場面の中に、作者が美を追求する激情及び純潔で峻峻の道徳観を感じ取ることができる。あの困難な時代に『紅瓦』は欠点を持つ普通の人々がそれぞれの方法で自分を変えながら

合理的な方法へ向かい、運命が異なっても人間性は共通しているのだという。人々が苦境の中で反省の道を開き、激励の光を探し、ついには人生の創造の中に身を投じて行くことを呼びかけている作品である。

『『全書は悲喜の情、聚散の跡を描いたに過ぎないが、人物故事は旧套を脱し、写実により返って更に新鮮になった』』という『紅樓夢』について、魯迅が纏めた『紅樓夢』の魂が、ひっそり『紅瓦』の屋根に入り込んだ。⁽¹²⁾ という評がある。ある面において文学の本質は挽歌である。又、文学は人類の前進の途次に失ったものを、永遠に見つからない精神楽園を探そうとする精神世界でもある。現在物欲の強い社会で、或はIT普及の時代の冷淡な現実に『紅瓦』のような古典の美学情趣と懐旧の念は誰をも感動させる。つまり古典主義的人間描写手法の選択は今後の中国当代文学が取るべき一つの選択の可能性を示している。

四、結 び

九十年代長編小説の基本傾向から見ると、伝統回帰を提唱する人々もいれば、神聖な伝統を覆えして現代意識を追い掛ける人々もいる。そのどちらも合理性を持っている。伝統の中には道徳・温情・良知が含まれ、これは金銭と物欲に押さえつけられた人々に良薬を与えられる。人々は過去に戻れないが、その精神を伝統の美の中に自由にさまよい歩かせることができる。一方、現代意識を強調する人々は昔の陳腐観念を批判し、歴史の題材・生活素材を再び分析し、現代が過去の歴史より進む前提条件に基づき、人性の覚醒・人道主義を求めている。この二つの考え方の方向はこれから絶えずに互いに補って変化発展しつつ、より良い作品を創作することができると信じている。

九五年以後の文学傾向は「無名状態」と言うより、むしろ文化背景に平淡化されると言った方が良い。平淡化とは九五年前の中国歴史上の苦難に対して言っているのである。その時代の凸凹な道りがあったこそ、作家達に豊かな感情、

小説創作に様々な題材が提供され、伝統回帰・家族史・経済改革・古典主義等の長編を生み出すことができた。

だが、平淡化は新世紀の文学の精神氣質に強い影響を及ぼしている。この平淡化された文化背景で育てられた青年作家達は新世紀文学の主力軍であり、文学の未来は彼らの肩に掛かっている。彼らは戦争の体験・亡国の苦難・「文革」の記憶等はない。又農業文明化・経済改革の重荷も背負っていない。そして内憂外患の憂いは勿論深くもない。これは人間として幸せな事かもしれないが、作家としてはそうでもない。例えば九五年以来、各種の傾向の小説は現実の腐敗・醜悪に対して深く掘り下げたが、作家が部外者の視点で創作するようになり、却って人間性・人道の美を追求する詩情が大量に流失してしまうことを感じる。又、九十年代に立ち上がった女性文学は「人―女性―個人」という周期を完成し、穏やかな発展段階を迎えた。女性の長編小説は文学の方向を導く役割を孕んでいる。古代から今まで女性の文学史上における状態は欠席と沈黙であった。唐代女性詩人の魚玄機の「自恨羅衣掩詩句」（羅衣：女性の意、女性はどんな立派な詩句を書き出しても出世できない）という經典詩句はこの状況を概括している。現今、女性に女性を書かせること、これは男性には描けない文学の世界を創り出す可能性を持っている。創作表現の方法において女性作家たちは現在の叙述言語に満足せず、女性自身の叙述言語を創作し、自らの叙事伝統を形成しようとしている。しかしこの叙述言語の創作は詩情を漂わせているが、女性としての生き方を表現する豊かな中国語を又十分に作り出していない。これらは心配することではない、もし事実だと思えば、我々は古い題材がもう色あわせてしまい、新しい題材が浮び出しているということが指摘できる。これは物質と精神・金銭と道徳の衝突である。この衝突は新世紀の文化背景と共に進みつつ、必ず都市生活の優勢、現代意識の優勢、「詩句」を「羅衣」に返すだけではなく、「詩句」の中に真実の美しい「羅衣」が見えるような女性文学の発展等は、新世紀長編小説の基本傾向になることであろう。（女性文学についてはいずれか将来に別に詳しく論ずるつもりである）

今日の生活は昨日の発展であり、明日の生活は今日の生活の発展である。従って現代を生きる我々は古今の民族性或は国民資質の変遷をどうとらえるのかを追求することが課題である。文学もまたこの変遷の中で発展しつつ、広い空間を求め、不朽の道を歩んでいる。我々は「人」の生命の潜在能力を充分に発揮することができる環境に憧れる。二十一世紀の中国当代文学の道は男性と女性が共に開拓すべきものである。

〔注〕

- (1) 『世紀之交の文学現象』『九十年代文学面面觀』文学報・文汇报、二〇〇〇年十一月二日・十一日。
- (2) 『九十年代文学：趨時応変、蓄勢待発』（から引用）国際関係学院学報、二〇〇〇年二月。
- (3) 「新时期文学」とは、「文革」が終結した一九七九年から現在に至るまでの中国当代文学をいう。
- (4) 鄭義著『神樹』三民書局股份有限公司（台北）、一九九七年九月。藤井省三訳『神樹』朝日新聞社、一九九九年十月五日。
- (5) 陳忠実著『白鹿原』（『当代』に収録、一九九二年六月〜九三年一月）林芳訳『白鹿原』中央公論社、一九九六年十月七日。
- (6) 高行健著『靈山』聯経出版事業公司（台北）、一九九〇年十二月。
- (7) 「先鋒・実験派」とは、八六年前後「西方」受容における真偽を問う議論の段階に突入する。その後余華・馬原等といった「先鋒・実験派」作家が次々登場し、一つの動向を形成していく。（『図説中国20世紀文学』白帝社、一九九五年）
- (8) 蘇曉康著『河殤』北京現代出版社、一九八八年六月。
- (9) 「天に二つの太陽はなく、地に二つの王はない。」「史記」「高祖本記」より、中華書局、一九五九年九月。
- (10) 『華夏文摘増刊』、二〇〇〇年十月十四日のITから抄訳する。
- (11) 『看劉震雲抽故鄉面』北京青年報、一九九八年十一月十四日。
- (12) 曾鎮南著『評《紅瓦》兼論現實主義』文芸報、一九九九年六月三日。